

グローバル・カフェ「留学報告イベント(台湾編)」を開催しました

2024年1月30日(火)18時から、「留学報告イベント(台湾編)」を開催しました。国立政治大学(台湾)で10か月間の留学を終えた馬場優汰さん、土壁直仁さん、村上洋信さんが大学の授業の様子や、現地での生活などを紹介を行い、日本人学生4人、教職員5名の計9名が参加しました。三名ともJASSOの海外留学支援制度(協定派遣)でインターナショナルオフィスが申請した「SDGsと紐づけた学習活動の実践によるグローバルコンピテンシーをもつ『がいな』人材育成プログラム」の奨学金支援を得て留学しました。

馬場さんが履修した授業のひとつは、台湾の原住民族の一つ「泰雅族(タイヤル族)」について学ぶもので、授業の一環として、タイヤル族が主食とする「竹筒飯(たけつつめし)」を食する機会があったそうです。炊きあがった米を竹筒の内側にある薄皮と一緒に食べることで、竹の香りとほのかな甘味が口の中に広がり、想像の何倍も美味しかったと述べられました。授業の最後には、中国語で行う発表会がありとても緊張したが、台湾人のクラス



メイトたちがサポートしてくれたと語ってくれました。馬場さんはこの留学を振り返って、言語が持つ力を痛感した、現地の言葉を話せるようになるにつれて、どんどん出会いの輪が広がっていくのを実感した、留学終盤にはクラスメートの紹介により学外の友人と知り合うことができ、家にまで招待され家族の一員のように扱ってくれた、と話されました。

土壁さんは留学目的の一つに台湾の法律(特に財産分野)について学ぶことを掲げ、「社会法」「保険法」「法制史」「国際公法」などを履修しました。授業は1コマ3時間(1時間毎に10分休憩)、全18回で3単位。授業中は教員が学生に質問を投げかけるため、学生が発言する場も多いが、常に飲食可能でありリラックスして受講できる環境であったと話されました。放課後は大学の合気道サークルに所属し、留学中に開催された学生大会ではなんと4位に入賞されたそうです。故宮博物館、九份、夜市といった有名観光地を訪れた際には、現地の人はとても友好的で、日本語で話しかけられることも多かったそうです。



村上さんは自身の趣味であるeスポーツについて、台湾では政府が公式スポーツに認可し、高校や大学にeスポーツ関連の学科が設立されているのに対して、日本ではゲームは悪者のようなレッテルが貼られていると感じると述べ、台湾のeスポーツ文化を知るためにも今回の留学を決めたと話しました。

「国際金融」「産業経済学」等を履修する傍らeスポーツサークル、TPRG(テーブルトーク・ロールプレイングゲーム)サークル、ボクシング部に所属しましたが、中国語や英語でのコミュニケーションがう

まく取れず、自己嫌悪に陥る日もあった、と語りました。授業では英語で書かれた教科書を中国語で説明するため、授業についていくためには中国語だけではなく英語も必須であり、日々ストレスを感じましたが「ストレス=成長過程」と信じ、授業に出席した自分を褒めることで乗り越えたそうです。また部活動に参加することで、共通の興味を通じて言語を超えた交流ができたとし(特にボクシング部員とは拳で語り合えたとのこと)留学する際には部活やサークル活動に参加することを勧めました。



2024年2月から10か月間、国立政治大学への留学が決まっている参加者からは、「現地の人と初対面の時はどう挨拶をすればいいか?」「どこで知り合いを作るか?」との質問があり、土壁さんは、自身は



話しかけられることが多かったとし、言葉に詰まった時はスマホのアプリを使いながら会話を進めたと述べました。また、村上さんは、知り合いは授業や寮、部活動を通じて作れる、特に授業ではグループワークもあるので、授業内で話す機会も多いから心配はいらない、言葉も文化も違う国で生きていくことは大変なこと、その環境に身を置いているだけで100点満点としていい、と激励の言葉を送りました。

今回のイベントは3月22日(金)、「Barry Russell 博士トークイベント」を開催します。オーストラリア、チャールズ・ダーウィン大学フェローである魚類学者 Barry Russell 博士をお招きし、オーストラリア、ダーウィンにあるノーザンテリトリー博物館(MAGNT)と、ご自身の研究についてご紹介いただきます。